

日本音楽における涙

名古屋大学文学部 高村正一

先日、ソ連のバス歌手エイゼンさんの公演のあった夜、楽屋で、多分「歌ごえ」の人々でしょう、自然発生的にロシア民謡「灯」がうたいたされました。その時、エイゼンさんの伴奏者であり、指導者であるヴィノグラドフさんが不意に立上って、「もっとテンポ早く、センチに流れないで」と棒をふりはじめたことでした。「夜霧の彼方へ、別れをつけん……」，うたいたしからして、日本の流行歌のいわゆるセンチな内容に似ています。しかし本当は戦いに出る人を愛惜しながらも、雄々しき出で立ちを励げます、愛情のこもった、しかし、力強い内容のはずです。そうした歌が、エイゼンさんの歌に感動して、自然に集ってきた日本人に歌われた時、ロシアの人にはセンチに聞かれてしまった。エイゼンさんのリアルな暖かいが、力強い、センチな所の少しもない歌に感動できる人々が、いざ、自分がうたうとなると違ったものになっている。これは、自然発生的な素人の集団のもつ技術的な拙さや見しらぬ人々の偶然の集りの中で、不意に歌いだすことに不馴れな、自分の内容を十分に出しきれない、無意識なためらいがわざわざしていたでしょうか。

多分そればかりではないでしょう、それは「うたごえ」の人々と見られる感覚の中にすら根強く残っている江戸時代に慣らされた、古い感覚の紐——低迷趣味、はかないものへの憧れ、例えば、「別れ」であれば単なる肉親の愛情だけからする悲しみといった、ひろがりを持たない感覚、等々、情緒のキメの細やかさは比類ないとしても、その全人間の能力の可能性からみれば、きわめて限られた感覚の世界の中で、しかも、自らが自らの情におぼれるといった客観性の少ないもの——をひきずっているようです。「原爆の歌」にしてからが、アメリカのそれが「大統領に手紙を出そう」といった、カラッとして行動的なもの（直接被爆してないから、悲惨さの実感がわからないだろう、という批難はとにかく）と逆に長々と焼土の悲惨さの中に低迷している。

いわゆる進歩的といわれる人々の感覚にしてからがこれであるとするなら、これらの感覚にならされてきた長い期間の伝統音楽の、しかもますます縁の遠くな

ってゆきつつある子供達にどのように、何を教えるのか。

幼児の間には、泣いている中に、自分の涙に溺れてしまっていて、その甘さの中で、泣く原因を忘れてしまう、涙で一切を流してしまう時期がある。音楽はあまりに肉体的、直接感覚的で妥当でないが、大人の感覚表現技術を教えこまれない子供の絵のなんとのびのびしていることだろう。若芽の旺盛な生命力そのままに、何を挫折もなく、明るく、力強いものを表現する。低迷はない。これが人間の本来の姿であろう。が、日本音楽史では、この姿はせいぜい元禄期までといえる。後は、涙で流してしまう、自分をその情緒の中に流してしまうものが殆んどとなる。もしくは太平楽をきめこんだ平安貴族式に花鳥風月に身をゆだねたり、粹や幽玄といった今日的感觉では不可解な趣味に逃晦するか、シャレのめすかだ。

ただ民衆芸能の中に、「流れて」しまわない傾向のものも多い。これは、直接生産にあたる者の本来の姿だが、それは相手が実体のない＝形式的抽象的な権力でなく、一応は自分の手を加えることのできる具体的なものであることによる、仕事の間中は自己の力に確信を持てることによる楽天性からだと思う。しかし、それだけに労働内容や中世の地域社会の閉鎖的な枠にしばられ、素朴な——可塑的な——旋律は同じでも、自由に内容のかえうる形式になる。（ここで民謡＜特殊なもの＞と芸術的なもの＜個別的＞—したがって、地域、労働形態等の特殊的範疇が止揚され、全人間的＜普遍的＞諸活動が反映される—との本質的区別をのべる必要があるが略）日本民謡では陽旋は容易に陰旋に転化でき、日本的ペンタトニックの唯一の個性化の要素である「こぶし」—節廻し—の精細化は感覚主義への危険を内包する。5音音階自身がメリスマ風に流れやすい無限旋律的要素をもつ等々。

したがって、子供達におぼえやすい、また喜んでおぼえる流行歌がペンタトニック的だから、それに似ている今様や箏や民謡にも近づき易いではないかという素朴な楽天性は有害である。これによっては逆に当世のリヴァイヴァルブームにのせられるだけのことだ

日本音楽における涙

し、その内容いかんでは、先にのべた子供達のリアリティに反する。むしろ今は失われているように見える子供達のに似た強い生命力あるリアリティをこそ日本音楽史の中に求め、それがどのように変質し、変質させられたかを、単に形式を教えこむのではなく、生きた内容を具体的に、子供にアピールするよう復原すべきであろう。そうした土台の積重ねの中で始めて、ナポリ民謡の発展（中世民謡→ピエディグロッタの祭の変質と国家独立を契機とする近代民謡）のように、近代、現代日本民謡の発展の素地が約束されるのではないだろうか。

そこで日本人の《涙》は、自分をその甘さの中に流してしまうことをやめ、健康で楽天的な《笑い》と表裏をなして、もっとリアリティのある、きびしさ、広がりをもった愛情、力強さを伴ったものになるのではないか。

そのためには私達教師自身の感覚が、そのように陶冶されることが第一であるし、陰旋がどうの、リズムがどうのといった形式にまず重点がおかれるのではなく、いつもいわれることだが、子供達と共にその音楽であそべるよう全人間的な導入しかありえないではないか。形式面は二の次と思う。